

特集Ⅱ

映画『カメラを止めるな!』を斬る! 編集部

2018年 アスミックエース/E.N.B.Uゼミナール 96分

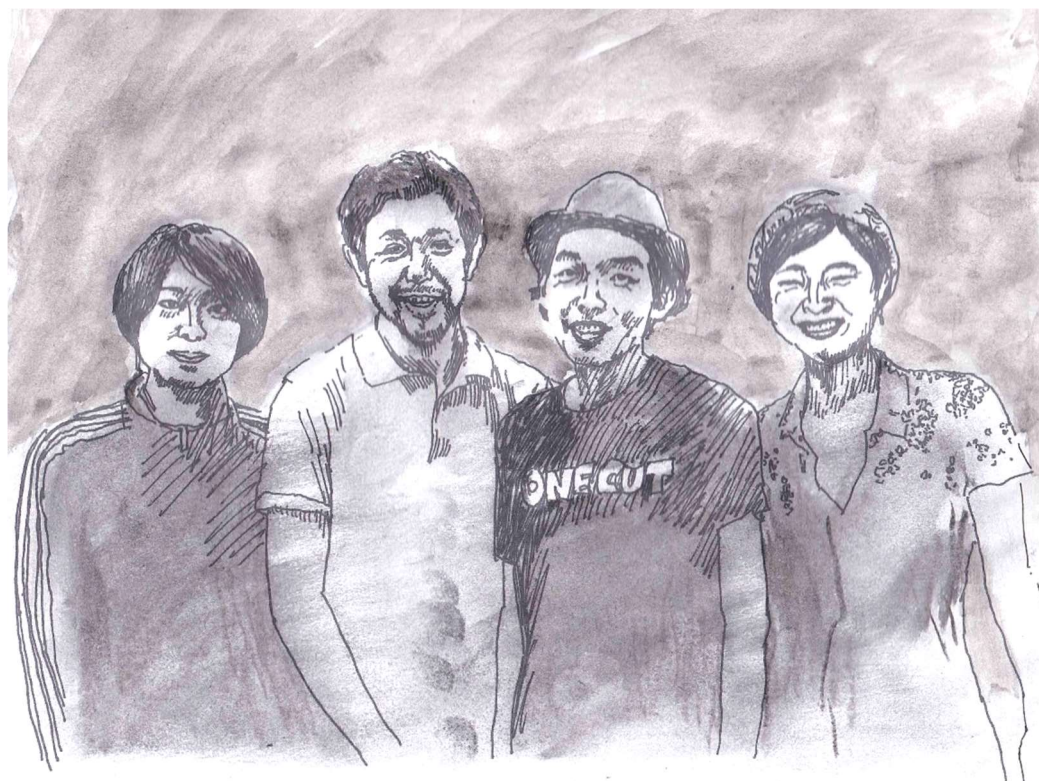
監督・脚本 上田慎一郎

出演 浜津隆之、真魚、しゅはまはるみ、長屋和彰

2018年の映画界は是枝裕和の『万引き家族』がカンヌ映画祭でパルムドール賞に輝くという久々のビッグニュースで盛り上がった。また、国内では新人監督が僅か300万円弱の製作費で、30億円を超える興行成績を上げ、観客を呼び込んだインディーズ映画『カメラを止めるな!』(上田慎一郎)が巷でチヨウ話題となった。小誌のベスト3ノミネートでも作品、監督ともダントツになった。

しかし、一方では何が、どう、映画としていいのか?ということになる、なかなか答えが出なかった。そこで、ここに賛否両批評を取り上げ、この作品を改めてレビューするこ

ととした。
さて、今までの映画の常識を破った、衝撃的な上田の世界をあなたはどうかとらえるか?映画史に残る作品と見るか、それとも...



否定派

人間の内面を見つめる主体性が欠如

吉村英夫 映画評論家

こんな映画を何百万人もが見て、その多くが面白いとか素晴らしいと評価するのは！この映画に「人間」が描かれているかといえば、皆無ではないか。何か思想性や政治性その他の主張があるのか。プロパガンダ映画はダメであるのは当然にしてもである。ワンショットの試みにある種の奇を衒った表現意欲があるのは認めるが、つくり手の根幹をなす人間の内面を見つめる主体性ぬきの映画を認める気にはならない。

「キネ旬」が昨年1970年代、80年代のベストフィルムを選出していたが、私の気持ちには全くそぐわないものだった。日本映画は1950年代の小津、成瀬、黒沢、木下、今井とそれを支えた水木洋子、橋本忍などの奮闘によって、世界映画史の頂点を極めたと思うが、その伝統を、以降の日本映画作家たちはこわしてめちやくちやにしていった。毎年、頑張っている作品が皆無ではないことは認めるにしても、50年代を超えられないのが情けない。

否定派

一過性のスラップスティック喜劇 林久登 スタッフ

私はもともとゾンビやホラー映画に興味はない。しかし、今回は、この映画がいろんなところで話題になったこともあり見に行くことにする。さて、映画は冒頭から、血に染まっただけ金切り声を挙げる女に男がナタを持って襲いかかる場面から始まる。出だしからうんざりする。何故追っかけられているのか分からない得体のしれない人間たちを、手持ちカメラで追っている。画面が揺れるので見ているうちに気持ち悪くなり、目をつむっていると、いつの間にかウトウト眠ってしまう。

気がついたら、画面が静かになっていて、丁度撮影一か月前のテレビ局との打ち合わせシーンになっている。それから次々と撮影の舞台裏やからくりを明かすメーカーキング映像、日頃いかに観客はウソの世界で騙されているのか、スラップスティックの喜劇よろしく見せてくれる。まるで手品の種明かしをしているようで……なんだこの映画、禁じ手じゃないのと感じた。

それから一か月ほどたつて、私たち「シネマ游人」の酒席で、この映画が話題となる。いわく、「メチャメチャ面白かった」、「今まで観た映画の中であれだけ腹から笑えたのは初めて」、「脚本もしっかり練ってある」等々、とにかくすごい盛り上がりになった。しかしそれほどインパクトのある作品なら、これからの映画への影響はあるのか…ということになると、皆、口ごもってしまった。

私自身、いい加減な見方しかしていなかったので、気を取り直して、もう一度、最寄りの映画館に挑戦する。今回は腹を据えて、少々気持ち悪くなくても我慢して、最後までバツチリ目をあけて見る。ワンカット37分のゾンビ映画、確かにシナリオがしっかり練られ、伏線もうまく張ってある。虚を突いているところが随所にあり、娯楽作品としてはAクラスだろう。しかし面白いといっても、脚本家の長田紀生のいう Interesting ではなく、Fun なのだ。一過性の面白さに過ぎない。

この映画はリピーターが多いということだ。映画評論家の寺脇研はこう言っている。「リピーターの人は、この映画をクイズかパズルと思っているのではないか。解いてみて、わからない箇所があるから、それでまた確かめに行く。ネット

で広がったらしい。テレビゲームを大スクリーンで見られるという感覚ではないのか」

確かに見れば見るだけ新しい発見がある。ジグゾーパズルを埋めていくように。その発見は楽しい。それだけ脚本が練られているせいでもある。しかし、それは本来の、映画の本質から、はずれてはいないだろうか。映画という媒体を通して、人間っていったい何なんなのか？この不可解な生き物の正体を求めて、作家たちは、さまざまな人間ドラマをつくり、スクリーン上でその答えを求めて来たのではないだろうか。そういうものを、ゲーム扱いされては困るのだ。

確かに映画を作るということが、いかに大変で、チームワークを必要とするのか、出来上がった映像の裏に何と多くの仕掛けが用意されているのか、ということがよくわかる。これは今までの映画では、知らされ



ていなかった直^{じか}に見る裏の世界だ。しかし、だからといって、既存の文法を無視したこのような作品が、これからの映画の流れを変えていくのかというと、それはないだろう。

上田は「今回は、人間ドラマをかなり捨てて、面白さそのものにドライブさせた」と言っている。次回こそ勝負となる。

否定派

批評性もないまま、着手した一例 藤田明

映画評論家

ワンカットによる前半37分。ヒッチコックの『ロープ』をご存知か。ソクローフの『エルミタージュ幻想』は？いやウイリー・フォルストの『マヅルカ』は？。このウイーン派の作品はワンカット映画ではない。しかし、一つの話を別の角度からまた描きなおすという構造で、日本の批評家では南部圭之助だけが評価していた。敗戦直後、フィルム不足による番組の穴を補うべく邦画各社とも戦前のヨーロッパ作品を新版公開したわけだが、『マヅルカ』は松竹系のそれ。津

だと新世界に来た。中学生だったが、惚れ込んで二度三度とその日は続けて見た。入替制でない良さ。おかげで大切なカギをその間に紛失し、帰途苦しんだのを覚えている。空腹を意識しなかったのも今から思えば不思議と言うほかない。店など何も売っていない焼け跡だった。

話を戻すなら、映画史上のそんな作例の勉強をしてから着手してほしかったの一語に尽きる。37分の内容がまずつまらない。似たような題材でも見どころのある37分は可能だったはず。37×2では長くなるから18×2にしてもいい。テレビ局用の37分。それはそれでカット刻みのありきたりの作として制作。せっかくなので自主映画用にワンカットの作品も平行して作る。そして後半のメイキング部分というわけだ。2本の18分ものうち、テレビ用は凡作にすぎず、自主用は力作になりえた、とするなら、テレビが例外を除いていかに墮落しているか、という現状批判にも通じるのではないか。

30代前半の上田慎一郎のこの作品で興味を抱いた例はカメラマン交替の辺り。趣向として面白かった。俯瞰のラストの謎解きもわるくないが、いい気なそんな局部よりも、映画史の上で自分がどこからスタートするか、だと思う。批評

性もないまま作に着手というのは不可。その辺は昨今の日本映画の欠落部分に思えてならない。「ぴあ」の進出以降、価値観が映画界から消失してしまい、劣化は見る側にまで及んでいる。

私の立場は、2018年と言えば『沖繩スパイ戦史』『ニッポン国VS泉南石綿村』、かなり落ちるが『菊とギロチン』などを評価したいわけだ。『万引き家族』ワーストワンという「映画芸術」には拍手なのである。



肯定派

仕組まれた伏線を回収していく面白さ

井上静夫 同人誌主宰

まずは批判的な意見と評価する意見の両方があるということ自体喜ばしいことだと言いたい。

個人的には予備知識なしに観たせいか、いわゆる「ヤラレタ感」が強く、面白い作品だと思った。インディーズ映画でここまでできるのかと大いに感心もした。

もちろん、インディーズ映画ならではのキツチュというかチープというか、独特の匂いが漂っているし、随所にわざとらしいところがあるのは否めない。もつと言えば、ムチャぶりという設定があったり、裏側にトラブルがあったり、そして低予算という事情があったりすると、どんな批判もこれで否定できてしまうという狡さがある。しかし、そのことを考慮してもなお、エンタテインメントとしての面白さがてんこ盛りで、観客を楽しませるサービス精神そのものが評価に値すると思ったのである。

作品は3層構造になっていて、それぞれのパートごとに面

白さが異なる仕掛けになっている。最初の37分間のワンカット部分は多くの人が違和感と安っぽさを感じると思うが、実はこの違和感を許容して入っていきけるかどうかで作品の評価が分かれるように思われる。そして映画通の人は案外受け入れ難く感じるようなのだ。

このワンカット部分が撮影されるまでの経緯説明となる第2部は監督視線で描かれている面白さとキャラ立ちにある。映画を観終わった後には、このパートの必要性を再認識してさらに面白くなると思われる。

そして第3部のメイキング部分になると、ぐいぐいと怒涛のドライブ感で引っ張られ、幾重にも仕組まれた伏線をあれよあれよと回収していく面白さに圧倒される。最初のワンカット部分が演劇的なら、ここは実に映画なのである。この映画にリピーターが多いのはこの種明かしの答え合わせによる気付き・発見のおもしろさのせいもある。ワンカット部分の違和感もここでいっきに解消され、そうだったのか、と思わせられ、監督の術中にハマったことに気付かされるのである。

これらの背景には、周到に練られた脚本があることはもちろん、演技はただの演技ではなく、所々ホントのアクシデン

トが発生し、それをしたたかに利用していたり、必然性を持って無名の俳優を使っていたりして、エンタテインメントとしての映画でしかできないことをやり、映画をよく知る人も、そうでない人にも面白く感じさせる工夫がされ、映画愛に満ちた作品になっているのである。

どうやらこの映画、フラットな気持ちで受け入れることが楽しむ秘訣のようだ。

肯定派

抜きんでた着想がこの映画の本質

西松優 日本映画愛好家

この映画は、金はなくても志、大衆の求めるユニークなアイデア、よい脚本、演技力、映画製作参加者の一体感があれば魅力ある映画作りができることを証明してくれた。

ネタバレすると面白さが半減する映画なので、以下抽象的に書いた。

一回目見た時には、このゾンビ映画の圧倒的な面白さと観

客をグイグイ引っ張っていく力強さに感心した。見終わると「感動」と言うより画面と一体化した「達成感・高揚感」と「心地よい疲労感・安堵感」に襲われた。この映画は三十数分の長回しが売りになっているが、スリリングな場面展開の面白さ以外に、家族愛、舞台裏の覗き見、意表を突く後半の反転、印象的なラストシーン等見どころが多い。

二回目細部を意識して見てみると、日本映画の父牧野省三の「一筋(よい脚本)・二ヌケ(鮮明な画面)・三動作(よい演技)」という言葉を思い出した。この映画には「一筋・三動作」が忠実に体现されているのである。抜きん出た着想がこの映画の本質だ。しかし、それを具現化するための緻密に組み立てられた三重構造のストーリー・すべての役柄に魂を吹き込んだ人物造形(脚本)、俳優と役柄のベストマッチ、無名俳優ばかりの演技陣(演技力)が素晴らしいのである。そして、映画の中ではそんな素振りを観客に全く感じさせないのがこの映画の持つ本当の力だ。脚本と無名俳優たちの演技を「熟成」させた上田慎一郎監督の粘りと技量を高く評価したい。

肯定派

緊張感と違和感そしてラストの快感

村上暁
スタッフ

この映画は4回始まる。①ワンカットの37分間、②1ヶ月前、③生放送スタート、④ラストシーンの危機

①冒頭からのワンカット動画。いつまで続くのかという緊張感と、時々感じる違和感。一瞬たりとも目を離さずに集中したものだけが、後半部分で快感を得ることができる。ゾンビ映画特有の、ホットパンツ&ぴったりTシャツ着用のセクシー女優も、たっぷり堪能できます。

②1か月前に戻ると、ワンカット場面で登場した人物(役者として)と、いわゆる素の部分とのキャラクターの違いが楽しい。狂気の鬼監督は、妥協を重ねる弱腰監督。悩める女優は、見た目しか気にしないアイドル。イケメン俳優は、理屈っぽく気難しい男。

その他の登場人物もすごく面白い。シャイニングのTシャツを着ている監督の娘は、映画が好きすぎて、妥協を許さない。カメラマン助手は暴走女子。超いい加減なプロデューサ

ー。これら登場人物を見る限り、まともな作品はできなさそうだけど……。

③生放送がスタートするも、案の定トラブル続発。①の違和感の理由が、次第に明らかになっていく。

特に、カメラマンが変わった瞬間の過剰なズームイン、ズームアウトあたり、監督の娘の、「なにこれ、ダサかけー！カメラマン変わった？」というセリフが最高。あの瞬間に、こんな劇的な世代交代が行われていたことに、感動さえ覚えた。

トラブルの中で、登場人物同士の関係性も変化してくる。

俳優に遠慮していた弱腰監督が、アイドル女優とイケメン俳優に本音をぶちまける。「嘘まみれのその顔、もう見たくねーんだよ！」「これは俺の作品だ！リハの時からグダグダ口答えばっかしやがって！」。その姿を見て、父を見直す娘。

演技中、ゾーンに入って、

「親父にもぶたれたことがない」イケメン俳優にビンタをくれます監督の妻。爽快な場面だ。

いったんカメラを止めようとするスタッフに、ストーリーがつながる部分まで戻して続けるよう説得する監督の娘。

いい作品を作りたいという気合が、次第に現場の空気を支配してゆく。

④そしてクライマックス。ラストシーン撮影が危ぶまれた時に、監督の娘が出す起死回生のアイデア。

プロデューサーは、「無事に終わらせましょう」とラストシーンを切り捨てようとする。放送終了の時間が迫る中、はたしてラストシーンは撮影できるのか。

③の後半と④で、映画を作る者たちの必死の姿が見えてくる。この映画の本当の見どころはこの部分だ。与えられた俳優、機材、人員で、どこまで良いものが作れるか。はじめはバラバラだったスタッフ・キャストたちが、映画作りを通して団結する。

必死になれば、本物の涙が出る。クレーンがなくても空撮ができる。若者たちの懸命な姿に、父娘のドラマが加わり、感動の嵐。

緊張、爆笑、感動。まさに、「ダサかけー！」映画でした。

